

(翻刻)『類題三河歌集』(三)

繁 原 央

〈竹尾正久輯『類題三河歌集』の翻刻の(三)として、本稿は下巻の「戀」と「雑」の部を収める〉
(下巻)

參河歌集

戀

- 戀 草も木もなへていもせは有ものをなと我ひとりよにはつれなき 忠順
いでといは、岩もさくへきますらをもと心うする恋の道かな 宣光
ち、は、のいさめを守る人たにもまよふは恋のやみちなりけり 忠淨
よそへてもなくさめましを我思ふ人には似たるかたしろもなし 千濤
いのちさへ身さへをしますなりゆくはたか為にする恋にか有らむ 真一
- 初戀 あやなくも人にくからすおほゆるや恋てふことのはしめなるらむ 美石
二葉よりあやしくもゆる恋草のしけらむ末ぞ思ひやらる、 公阿
しのふ山たとる、ゝゝも入そめてくるしきこひの道にまとはむ 義宣)(1オ)
はつを花ほに出て人を思ふこそ袖に露おくはしめなりけれ 純孝
恋衣なれぬいらへはやすらへとうらなくたのむ人のかねこと 常業
- 忍恋 いかにせん物やおもふととふ人にもらしかねたる袖の雫を 公阿
しのふれといろに出つゝ人めにもかゝりやすきは涙なりけり 元明
此世たにしのひはてなは恋しなん後のうき名はさもあらはあれ 英棟
いかにせん涙をたにもしられしとおさふる袖もつひにくちなは 古道
- 忍涙恋 涙たによにもうさしとしのふるは人のうきよりくるしかりけり 公阿
- 忍親昵戀 かすか野の若紫のゆかりにもみたれは見えししのふもちすり 忠順
- 忍久恋 年経てももらしかねたる思ひゆゑつゝむ涙そ袖にあまれる 鳥田里江女
しのふ山しのふなけきの下露にいく年月か袖ぬらすらむ 渡辺政芳)(1ウ)
- 不言出恋 いひ出ぬ池の心もくみてしれ人めつゝみの袖のなみに 常業
- 見恋 かりそめのみるめからすはあま小舟よるゝ、かくはこかれさらまし 重鉄
- 不見恋 あちきなく見もせぬ人を恋衣いかて心におもひそめけむ 菅沼勝行
- 見増恋 すきかけをほのみてしよりいやすたれいよゝゝ我は思ひかけつゝ 繁樹
- 白地恋 あま小舟こひわたれともかひそなき只かりそめのみるめ計に 信貞
- 通書恋 思ふ事今うちての濱千鳥はかなき跡をたゝたのみつゝ 政弘

かき残す心のほとをいかにせむとる我筆はかきり有けり 忠順
 不見書恋 ふみかよふかたも有けり我にのみなとかつらきの久米の岩橋 美石
 祈恋 いのりてもかひ社なけれ貴舟川かはらぬ浪にぬる、袂は 武定
 泊瀬寺法のともしひとすれはいのるかひなみきえぬへき哉 清蔭」(2オ)
 なからへはあはんしるしもありやとてみをこそ祈れみわの神杉 忠順
 祈不逢恋 いのりても猶あふ事はかたそきのちきりし中と神や思はぬ 音空
 貴船川いのるまこともいつはりと神もやうけてつれなかるらむ 大成
 きふね川あふせを人の道にとはおもひやかけし浪の白ゆふ 正久
 不逢恋 あまのこかてにたとらぬかたし貝あふ事かたき身となりにけり 釈報阿
 待恋 こぬ人をまつ嵐のよわりつるよはこそまされ心さわきは 公阿
 つれなさもさのみは人のとはかりに思ひまけてはまつゆふへ哉 弘道
 住のえのまつてふことやまぬ哉人忘草つみしものから 中村清行
 来ぬ人をまつとせしまの心よりねうしとまては夜そ更にける 仁(最後の一言なし)翁
 よもすから人まつ風の音絶てさひしきねやの暁のかね 伴玉女」(2ウ)
 待空恋 まつ風を心のおくにさわかせて空しくふくる月の影哉 政弘
 さ、てぬるまつ板戸もいたつらにあけぬと告る鶏の聲 遊佐敏雄
 いまこむとたのめし人をまつの戸につれなさみする在明のつき 弘道
 連夜待恋 こよひ又はかられにけりつれなさも限あらんのあひなたのみに 信由
 月前待恋 来ぬ人のさはりやなとなけきつ、なかむる月も雲隠せり 宣光
 待わふと人には告よなかめやるそなたの空にふくる月かけ 忠敏
 契月待恋 いてなはの月に契待宵の心もしらぬ山のはのくも 水野順治
 春日待恋 いかにせんかことの花も日数へて人はこすゑに春風そふく 美石
 燈前待恋 さりとともとか、くる閨のともし火のきえもはつへきこ、ちこそすれ 義宣
 逢恋 こよひたか涙たつねてやとるらむ我袖かる、有明のつき 英棟」(3オ)
 あひみつる心さわきにかねてより思ひしこともいはれさりけり 真一
 初逢恋 なかれての後のふちせもおもはすて結びそめぬる中川の水 廣岩敬敏
 あひそめてうれしき時もかはらぬはうきにこほれし涙也けり 鶯山
 やさしさにむねと、ろきてさしかはすにひ手枕もわな、かれけり 忠順
 稀逢恋 たま、にみるめかるよは白波のかへりて袖そひちまさりける 御楯
 なか、に袖くたせとや五月雨の雲間の星の稀にみゆらむ 千涛
 夢中逢恋 よひ、にあふもはかなや見し夢のさむるうつ、を別路にして 政弘
 夢路にはおもへは關もすゑさりきやすくそこゆるあふ坂の山 忠敏
 夢後恋 あふとみしそのおもかけはうつ、にも夢なりけりとさためかねつ、 森厚給
 旅宿逢恋 うらもなくに契らむ旅衣たひかさぬへきあふせならぬを 忠順」(3ウ)
 逢後恋 人こふる心のはてはなかりけりあふをかきりとなに思ひけむ 登波女
 あひみての心つくしをしらぬひのしらぬ昔になすよしもかな 慈導
 絶後逢恋 おりた、はいと、袂そひちぬへきうきせみえぬる中川の水 美石
 別恋 誰ともにいさとはいへと横雲のわかれかねたるしの、めの空 重武
 鳥の音をそへて袂をぬらす哉あかつきおきの露のわかれち 明
 思ひかねなかむる嶺の横雲もわかる、空にうちしくれつ、 俊又

- しら露のおきて別れし袖のうへにぬる、かほなるありあけの月 登波女
 きぬ、の袖の涙にかけわけてかへるさおくる有明のつき 元明
 今はとてかへるものから明かたに残るは月とこ、ろなりけり 安貞
- 後朝恋 涙のみしめりてけさは残りけりともにしほりし袖の月影 政弘(4オ)
 鳥のねにおきて別れし袖の露ひるまもまたてきゆはかりなり 青龍寺隆典
 契しは夢かうつ、かさためよとかきてそおくる今朝の玉つさ 顕光
 明ぬとてかへり来しかとたましひは妹かあたりをはなれさりけり 正久
- 名立恋 ひきてまたねもみぬものをあやめ艸あやしや人の名をそたてぬる 重見
 思ふ事いはての山の峯の雲か、るうきなのかてたちけむ 知来
 津の国のなにはかせこそたてにけれしのひにもえしあし火なからも 柳瀬岩女
 つのくにのなにはたてれとあふ事はあしのかりねのひとよたになし 本教
 いかにせん我名はそらに人まちて拂ふ枕の塵とたてるを 清水勝祥
- 無名立恋 にくからぬ人のうへにはぬれきぬをきしもなか、うれしかりけり 政弘
 なき名たにた、はとたのむ心にはさしもうしとは思はさりけり 兌健(4ウ)
 わけもみぬ小笹か原に風すきてうき身にか、る露のぬれ衣 大炊女
 夢にたにおもひわたらぬ中川にたかたちきする浪のぬれ衣 釈豊道
- 不惜名恋 あひつ川波とたつ名はさもあらはあれいかて一度わたりてしかな 繁樹
 なかさしと名を惜みしは思川またふか、らぬむかしなりけり 丈雄
- 顯恋 底ふかくかつきはてなて鳩とりのうかふ涙にあらはれにけり 篤慶
 つ、むにもあまる涙の色に出て恋は袖よりあらはれにけり 鶉阿
- 洩恋 恋すともいはまの水のつふ、とたかさ、やきてよにはもれけむ 政弘
- 契違恋 ちきりおきしす糸の松山かひなくてあた波こゆる袖のうへかな 正久
 ちきりつる我なか、みをよそにしていかなる方にかた、かへせし 重見
- 契絶恋 契てし詞の花やちりぬらむおとつれたゆる庭の松風 祐巖(5オ)
 むすひてし露の契も秋を経てかれゆく草に嵐吹なり 古典
- 誓恋 忘るなよ我も忘れし若狭路の後瀬の山といひし言はを 柳瀬政世
- 馴恋 須磨の蟹のあきのさ衣朝夕になれにし中そうらなかりける 武定
 ふりしこといひてはうらむ吾妹子かかさしの鈴のなる、此ころ 正久
- 増恋 我思ふ恋はますみの鏡にて夢にもさらずみゆるおもかけ 森田光義
- 久恋 年を経ておのかよ、とそなかれける昔わたりし中川の水 常業
- 思瘦恋 ひとにそふ物ならませはなか、にかけとなるみもうれしからまし 豊村
- 難忘恋 思はしとおもふにおつる涙哉あやしや心ふたつもちけり 登波女
- 切恋 木にならん鳥にならむとちきること此世にあまる思ひなりけれ 正久
- 疑恋 うちつけにかはず言葉のことよさにまた行末ぞ疑れぬる 正胤(5ウ)
 ひたふるにたのむの鴈もたのまれず又たか方によると鳴らむ 美石
 契てもうしろめたきは咲花のあたる人のこ、ろなりけり 顕光
- 互疑恋 襦の数みむてふ君がさよ衣あまたかさぬときくはまことか 五百杵
 かくばかりかたみに深くうたかふもたのむ心のあれはなりけり 宣光
- 見書疑恋 ひたふるにたのみかたしや薄くこくまきはしたる水くきのあと 忠順
- 偽恋 空ことにか、る心のうき雲は我袖ぬらすしくれなりけり 祐利

厭恋 雲もなくなきたる朝の空になと身をしる雨はふりまさるらむ 常蔭
 恨恋 へたてなき中もうらみはありきぬのありのすさびの心なりけり 常業
 絶なはの心よわさにつらきをも思ふはかりはうらみかねつ、 忠敏
 恋しなはそれをかきりと人やおもふあはぬ恨は猶残るよに 成庸」(6オ)
 俄變恋 時のまにありしにも似す成にけり人の心や秋の空なる 登波女
 絶恋 いまはた、つれなくみえし有明の月のみ人のかたみなりけり 英棟
 欲絶恋 ぬは玉のよるしもあはてかたいとのたえ、にのみなれる中哉 正興
 行路恋 立田山よはに越つ、思ふ哉つらきは恋のやみちなりけり 英棟
 旅宿恋 行暮てひと夜かり寐の草枕むすふもはかな露のちきりは 釈音秀
 馬上恋 わかれうき心もしらでのる駒のはやきあかきのうらめしきかな 廣冬
 隔簾恋 なけかしな心につらき玉すたれ人目はかりのへたてなりせは 兼久
 戀妨學問 たをるへき月の桂をよそにみて恋の闇路にまよふ比かな 忠明
 不及恋 恋はなと身のほとをさへそむくらむよにおよひなき物思ひつ、 顕光
 恋貴人 たをらめや雲のかけはしかけてたにおよはぬ嶺の花の梢は 忠浄」(6ウ)
 月は手にとられぬものとしりなから見れば涙のなにこほるらむ 利亮
 恋賤女 若菜つむ里のをとめをみてしより我下もえそやる方もなき 忠浄
 思出舊女恋 住すくし昔よりけにかをるなりふるき軒はのつまなしの花 忠順
 等思兩人 いつれをかあはれとは見むおもかけもならひの岡の春秋の色 千代女
 等思三人 み、なしもうねひも恋ししかりとてあをかく山をよそにやはみむ 忠順
 等思五人 玉鉦のよつのちまたに又ひとつ思ひそへてもふみまよふ哉 英棟
 幼恋 うらわかき野へのはつ草しめおきてむすはむほとをいつとまたまし 廣冬
 老恋 もろくちる袖の涙も老か身のならひと人の余所にみるらむ 千涛
 いへはえにいはいはて心をつくもかみ老の思ひにむすほ、れつ、 俊人
 恋心 われたにもいとふうき身をさりともとたのむや何の心なるらむ 弘道」(7オ)
 恋涙 人めをも今はつ、ましく涙おさふる袖もくちはてにけり 忠順
 恋夢 かれ、になりゆく中とみし夢のさむる枕に秋風そ吹 長廣
 よにしけき人目さはらぬ夢さへもさむるわかれはのかれさりけり 英棟
 つれなしと思ひたえたる中に猶かゝるもあやし夢の浮橋 朝倉正臣
 恋書 かくはかりくるしきものかいたつらにふみのみかよふ恋の山ちは 英棟
 恋衣 しられしとつ、む涙は恋衣なか、袖のいろに出にけり 御楯
 恋繪 思ひ餘りその俤をうつし繪にかくとは人のしらですくらむ 千代女
 暁恋 きぬ、の袖をしほりし別たにあらましかはのあかつきそうき 公阿
 夕恋 三日月のほめくみれば眉根かきあひし昔の恋せらるかた 繁樹
 春恋 春雨のふるされしみも鶯のひとくとなけはしたまたれけり 登波女」(7ウ)
 秋恋 あきといふ名たにゆ、しきをりしもあれ契をかりと鳴てきにけり 宣光
 はた寒くなるにつけても物そ思ふ君か心のあきやいかにと 片山近昌
 暮秋恋 朝顔の花をかことのかいまみもすへなく今は秋ふけにけり 千涛
 冬恋 あつ氷へたてはてたる山川もしたにかよへる水はなしやは 専女
 寄月恋 契にし春や昔となり果てうつるもかすむ袖の月影 大橋竹女
 恋わひてなかむる月の光にもおもひのやみはてらさ、りけり 祐巖

- 寄雲恋 うつりゆく人の心のむら雲は我袂にそしくれきにける 登波女
- 寄風恋 たをやめか閨のと過るあすか風いたつらふしの枕にそきく 公阿
契おきてまつよふけゆくまきの戸をいく度風の驚すらむ 森啓女
- 寄雨恋 我恋はかやか軒端の雨なれや音にたてねと袖はぬれけり 古考」(8オ)
- 寄時雨恋 こひわひて晴ぬ心のうき雲に袖はしくれのふらぬ日もなし 宣光
- 寄霜恋 暁の霜にこゝろのおかるゝは人目をしのふこひちなりけり 白井美教
- 寄雪恋 ふりつもる雪の中道さむくとも深き思ひをとひてしらせむ 定敬
- 寄名所恋 しられしとわけいる恋のみちのくはいはでしのふる外なかりけり 御楯
こはた川こはたか為そ馬はあれとよひゝゝことにかちわたりして 大炊女
- 寄山恋 かはりゆく人の心の浅香山なにあさはかにおもひ入れむ 信由
あさしとや人はみるらむ浅間山かはかりもゆるむねのおもひを 信榮
- 寄関恋 あふ坂は我にゆるしてことかたにかよふ心の関守もかな 千濤
- 寄野恋 ひとりぬるとここそ秋の野邊ならめよるゝ虫のねにそなかるゝ 積鳳瑞
- 寄瀧恋 瀧の糸のおもひみたるゝ我恋はよとむせもなくくるしかりけり 山本智信」(8ウ)
- 寄川恋 あすか川かはるならひやかはりけむ昔なからにわかうきせなる 古道
- 寄水泡恋 きえねたゝむすふ契もかひなくて思ひ数そふみつのうたかた 美石
- 寄橋恋 かつらきや中絶にける岩橋をわか身にかけてなけく比哉 英棟
いつまでと恋わたるらむつれなさは今もむかしのまゝの継橋 真重
夢ならでわたるよもなしあふことははやく絶にしまゝの継橋 廣冬
つれもなき人に心をかけはしのわたらぬ中も恋しかりけり 中山琴女
- 寄海辺恋 よる波のあらいそ崎のそなれ松はやくねにこそあらはれにけれ 公阿
袖にのみ波うちかけてみるめかるかたもなきさにみやつくさむ 豊村
うらみわひ海士のたくもの夕烟われから身をもこかしつるかな 外山羅以女
- 寄浦恋 いく度かうき身の袖にかゝるらむひとりぬるよのこの浦なみ 兌健」(9オ)
- 寄濱恋 こゑたてゝなかつの濱をゆきてみよ袂ぬらさぬあまのこやある 宣光
- 寄湖恋 みるめなき海なれはこそあふことをかたゝの浦と名にはおひけめ 安全
- 寄波恋 しらせはやあらいそ波の風をいたみちゝにくたけて思ふ心を 多米女
みるめなき浦としらてや白波のよりあひぬてふ名は立ぬらむ 菅守
いたつらによせてはかへる白波のたつ名はかりにぬるゝ袖かな 重鉄
- 寄船恋 ほてうちて沖へこくなる大船のゆくへあやふき恋もするかな 大竹政恭
うきふしのしけきあしまの捨小舟うらみなからもよる方はなし 重生
つなて縄長くとこそは契しか川そひ小舟なにかたゆたふ 八千代女
くちねたゝ又こく人もあらしかしあしまかくれのあまの捨ふね 年乃女
- 寄木恋 ことかよふ中をたのみに丹生川やなかつ木よるせをそまつ 杉山尋門」(9ウ)
- 寄花恋 うつりゆく人の心もしらずして花のみあたと何思ひけむ 中村盡忠
- 寄梅恋 風さそふ人の心の梅か香はまたたか袖にふきかよふらむ 常業
- 寄柳恋 よりてみむ妹か垣ねの糸柳なひかむまてはよしかたとも 千濤
風わたるはひりの柳ともすれはかたもさためすなびく君哉 御楯
- 寄竹恋 川の邊のいさゝむら竹いさゝめにあひみしものをことのしけゝく 繁樹
この君と思ひかけてもむなしくてまた一ふしの夢をたに見ず 仁(最後の二画なし)翁

いひよりし其よなからになよ竹のかはらぬ色をみるよしもかな 豊道
 寄草恋 かれねた、ありてうきみの思草か、るねさしの跡もなきまで 重熙
 わか園に植おほしつ、めてましをたれかしめゆふいにも似る草 忠順
 寄杜若恋 ゆるされぬ中のへたてのかきつはたゆかりの色もかひなかりけり 登波女(10オ)
 寄菖蒲恋 あやめ草あやめもわかむ人心ひきてもみはや根さしいかにと 宣光
 ひきて來し袖にかをれるうつり香に軒のあやめのあやめられつ、 義路
 寄朝貞恋 いまはとてわかる、露の袖かきにねたしやゑめる朝顔の花 釈住行
 寄蓼恋 草かくれほにもいてなてみつたてのからき思ひをつむうきみかな 千涛
 寄寒草恋 かれはて、風もとまらぬ葛かつらいまはうらみむことのはもなし 恒雄
 寄鳥恋 たえはてし我中川は鳩とりのなみゐる見てもねこそなかるれ 常蔭
 よと、もになみこす袖の浦千鳥空に音のみ鳴わたるかな 美石
 寄鶉恋 人心浅茅か原の秋風にわか身うつらの音こそなかるれ 美王女
 寄千鳥恋 わすられてよそになるみの濱千鳥今はねのみ見てやしのはむ 登波女
 寄虫恋 中繩てまつとしもなきゆふべにも心にか、るくものいとすち 内藤完懿(10ウ)
 くる、より思ひみたれて夏虫のうはの空なる我こ、ろかな 専女
 たのめおきてきまさぬ君にきかせはややすから人をまつ虫の聲 釈善界
 寄塵恋 ちりならぬうき名の空にたちしよりつもるはむねの思ひなりけり 長廣
 寄菴恋 このめになるまとのうちにも我せこをまつふく風の音そたえせぬ 忠順
 寄網代恋 いとはる、身をうち川のあしる人ひをのよるまつたのみたになし 美石
 寄琴恋 琴のねの我にはあらぬしらへともしらてくやくひかれきにけり 恒雄
 いまはしもたかまつ風にかよふらむかはるしらべのねやのつま琴 信由
 あふことのかたくもあるかな君とわか中のほそ緒のたえぬ物から 三千代女
 寄扇恋 身に近くなれにしからに恋しさはあきにあふきの別なりけり 釈觀隆
 寄枕恋 恋しさも思ひさまさむいにしへの夢の枕のあるよなりせは 公阿(11オ)
 いたつらにちりも日数もつもりけりかはさむ閨のつけのこまくら 年乃女
 寄絲恋 打とけぬ人の心のかた糸はた、ぬものからよるかたもなし 長廣
 寄衣恋 かへしても夢のた、ちに見えこねばうらみかさなるよはのさころも 常業
 寄帯恋 いつまでか心つくしのはかた帯とくるよもなき人をたのみて 千涛
 寄車恋 めくりあはむ時こそあらめ小車のわかれゆくとも君忘るなよ 伊藤佐伊女
 おしやらむかたこそなけれむな車あはぬなけきを積かさねつ、 政弘
 寄繪恋 うつし繪のうつし心もあらぬまでかきあつめつ、物おもふかな 高橋顯
 寄源氏物語恋 ふたかたにおもひこかれて浮舟のよるへさためぬ身をいかにせむ 登波女
 寄遊女恋 その人とさしてちきりし身にしあらは浪のよる、袖はぬれしを 賢空
 あひおもふ あひてこそ語あはせめ夢のうちにあふと見しよはあふとみしやと 精磨(11ウ)
 むかしあへる人 むかしみしま、のつき橋中繩て久しき人を恋わたる哉 恒雄
 ふみたかへ やちまたにかよふ心のおほけれやおもはぬ方にふみはたかふる 登波女
 くちかたむ 浦の名のみつとなひそあしのやにひとよかりねの夢の契を 大炊女
 なき名 ことならはいさおりた、むいさや川きにけるものを浪のぬれきぬ 美石
 ないかしろ くみそめてまたほともへぬ山の井を浅しとのみはなとかいふらむ 多米女
 七夕ひとつのもとに

まれなれとあはぬ年なきたなはたの心を君かこゝろともかな 孝本
 たひゝふみおこせたる男のもとにといふことを
 常磐山つひにもみちぬこす糸ともしられしけれのまなくふるらむ 古道
 恋祝言 千萬代天津日嗣のつゝけるも恋てふ道のあれはなりけり 公阿(12オ)
 (白紙)(12ウ)

雑

天 もろこしも月は西にやふけぬらむはてなきものはみそらなりけり 英棟
 日 たちはなのあはきか原のみそきより出てさやけき日のみかけかな 廣冬
 星 空の海や庭もしつかにはれし夜の星はまさこの数かとそ見る 千濤
 暁更寐覚 いさやとくつかへの道にいてたゝむ寐さめの窓にありあけの月 忠順
 夕 日はいりて月はまたしき小くら山ふもとのてらの夕くれの空 釈智順
 雲 日のもとのさかひなるらむわたつみの浪路の末の雲の八重垣 古典
 嶺雲 大空とひとつにみえし松の葉のみとりをわくるみねのしら雲 宣光
 関路雲 せきこえてゆきたひ人もおくれけり雲のあしときあしからの山 年之女
 嶺上雨 かけもなき高嶺の雨をいかにせむふもとはとほしみの笠はなし 正久(13オ)
 風 海山の浪も草木もおしなへて風のこゝろになひかぬはなし 古典
 不盡山 花もみちよそふたくひをぬけいてゝひとりことなる山はふしのね 忠敏
 耳無山 人ことのきこえるしき世の中にこゝろたかしや耳なしのやま 登波女
 山路没雲間 ゆけとゝゝいつこをはてとしら雲のたなひきわたる大木曾の山 学空
 野 うとましき軒のうはらも花さきてあはれ野守が袖にほふなり 忠順
 原 雨すくるうけらか花に風こえてゆふ日くまなきむさし野の原 廣冬
 名所橋 世々をへてあともなからの橋柱くちせぬ名のみきゝわたるかな 恒雄
 橋上苔 すみすてゝとしへしほともしられけり苔にあとなきかとの丸はし 顕
 寄水雜 なかれ出しそのみなかみはしら浪の末のみくめる世となりけり 政弘
 瀧 山姫のおるやしら糸くりかけてはたはりひろき布引のたき 中島嘉寿女(13ウ)
 なかれくるつゝみの瀧の音するは岩うつなみのひゝきなりけり 奥村保守
 岩かとうつやつゝみの瀧の音に松のあらしそしらへあはする 青翁
 雲間瀧 はこね山かゝれる雲のなか空にひとすちみゆるたきのしらいと 篤慶
 那智瀧 この瀧はたかしかしこしふしのねの雪のくつゝゝこゝちのみして 壽仙
 深山瀧 熊わしのはふく雫やみつちすむふちにおちくる瀧のみなかみ 英棟
 海 なかめやる熊野の海のしほけふりたてるや沖のくちらなるらむ 好文
 海邊夕 しつかなる風を舟路のつなてにて夕日にかへる沖のつり人 長廣
 浦の名のみつよつうかふいさり火はくれ行沖のみるめなりけり 繁樹
 藤江浦 春ふかくさくや藤江のうら波は若むらさきによるかとそ見る 隆啓
 三穂松原 ふしのねのあらしや雪をさそふらむ梢なみたつみほの松はら 信(14オ)
 ふしのねは雪のひかりにとくあけてなほよをのこすみほの松原 正久
 古戰場 つくしかた昔おもふもこゝちよし岩にくたくるおきつしらなみ 英棟
 もゝふの波にはむかふおもかけもうかふやしまの弓はりの月 宣光
 古城 をりゝゝはおに火もみえてはたすゝきなひく大城の跡そさひしき 忠順

大御國 えみしらもふかくしたふは神世よりねさしことなるあしはらの国 通度
 隣家 むつましく通ふとなりのなか垣はよそめはかりのへたてなりけり 英棟
 名所市 しかま河よわたるわさと朝またき市路にいそくかち人やたれ 忠順
 故郷松風 琴の音にかよふをきけはふるさとにみし世の友はたゝまつ風 宣光
 故郷泉 くむ人もたえていくよのふるさとなほすむものは清水なりけり 英棟
 故郷橋 ふるさとの前のたな橋けたくちて蜘蛛のいとのみかけわたしけり 千濤」(14ウ)
 閑居 世の中をそむくとまてはなけれとも人よりうとくすすまひかな 松充
 人またぬむくらのかとは松かせもくひなもたゝくかひなかりけり 弘道
 閑居水 うき世にはなかれさらなむ柴のいほの軒端をめくる松の下みつ 忠明
 閑居夢 たまゝにかよふうき世の夢はかりすてぬむかしのなこりなりけり 政弘
 閑居灯 かゝけつゝふみ見るまとのともし火の花さくへくもなきわか世かな 美石
 人とはぬ草のいほりのともしひはよにあるかひもなきひかりかな 千秦
 幽居 世のちりをはらひすてたるかくれかのこけの筵になにかしくへき 兌健
 よのちりはとはにはらひて耳あらふわつらひもなき軒のまつかせ 恒雄
 幽栖井 谷ふかきいほにしをれはいさらゐの水も心にすみそめの袖 深見妙誓尼
 竹裏館 かのみゆる竹のはやしのおくの庵うきふしなけにすむ人やたれ 忠順」(15オ)
 山家 いかにせむおもひいりぬる山さともなけきこりつむわさはありけり 義宣
 のかれきてみ山のおくにすみなから身にまかせぬは心なりけり 音秀
 山賤とうとみなはてそ春は花秋はもみちのあるしなりけり 釈梅点
 山家松風 山さとの松ふく風にさめにけり夢にみやこのつまことのこゑ 英棟
 さひしさになれなはとおもふ山さとをうき世にかへす軒の松かせ 長廣
 松にふくみ山おろしもきゝなれて心さわかぬすまひなりけり 寺部親光
 山家雲 ものおもふたかなかめにかかゝるらむ軒はの山の夕くれのくも 重鐵
 ゆふくれにかへるをみればわか山の雲もうき世はすみうかるらむ 政弘
 山家暁 ふくろふのなく松かけに月おちて暁すこき谷のしたいほ 忠浄
 山家烟 のかれすむみやまのおくの夕けふりなに今さらに世をはくゆらむ 美石」(15ウ)
 山家水 にこりなき岩ほのなかの真清水を心とすめる谷のしたいほ 定禱
 谷河のたえぬなかれをこゝろにてすみならひけむ山の下庵 松下春道
 山家橋 おもひいりてさらにいてしのあらましはくちたる谷の橋にこそしれ 宣光
 山家人稀 さひしさになれも人やよふこ鳥家ゐまれなるみやまへにして 篤慶
 山家述懐 人まねにのかれし山のかひやあると心にとへとえこそこたへね 政弘
 田家 あせつゝき田つらにたてる夕けふり賤かすまひのにきはしきかな 音空
 わかいほは山田のをしねかりそめの世とはおもへとすみうかりけり 隆典
 田家路 ゆつりあひし畔をくつきぬひなにのみ神代おほゆる道は残れり 公阿
 田家鳥 神無月おちほをあさるむらすゝめかと田の面をたちもはなれす 久倉
 別 思ひやる野山の末の露をさへかけてそしほる別路のそで 弘道」(16オ)
 江戸へ出たらむとするとき
 けふよりはかへりこむ日を松の色のかはらすいませうからはらから 御橋
 えとへゆく人のわかれに
 とゝめてもゆくをおもへはあしからの関の戸さゝぬ御代もうらめし 重世

陸奥へゆく人の別に

- 君かゆくそのみちのくは遠くともたえすかきこせつほの石ふみ 英棟
 とほき国にゆかむとしける時蔓にそへて妻にあたへたる
 おのかはふ松にならひて蔓かつらときはに色のかはらすもかな 山内健夫
 旅 月も日もきのふはいてし山の端にけふはいりぬとみる旅路かな 古道
 ふるさとをしのふや何の旅ころもきつなれにし妻もなき身に 仁(最後の画なし)翁(16ウ)
- 春旅 おもふとち桜見にゆく吉野山たひはうきにもかきらさりけり 英棟
 さくらさく淀の河辺に旅ねして此ころうときふるさとの夢 森本夏蔭
- 夏旅 たへさりしけふのあつさをかたりつ、月にわけゆく野路の旅人 千濤
- 秋旅 秋の野の菊のにしきををりしきて枕ゆふ夜は旅としもなし 登波女
 あきの野の花のさかりにゆきくれて月ともねの露の手枕 佐藤秀高
 さらぬだに露けきものを秋の野に草の枕をむすふよはかな 外山八代女
- 冬旅 霜かれし草をこよひもまくらかのこかのわたりの風の寒けさ 廣冬
- 暁旅 たひころも露かけそへりふるさとの夢にわかる、あかつきのそら 鈴木光重
- 夕旅 引むすふ草津の駅露しけみもとしをれてひとりかもねむ 直温
- 鞆中雨 かれいひもほとふる旅の雨衣なみたもそひてぬれまさりけり 常業(17オ)
- 鞆中嵐 霜こほる草のまくらのよもすからなれぬ旅ねをとふ嵐かな 山中古麻女
- 鞆中山 露霜のまよふ小笹をふみわけてゆく袖さむしさやの中山 宣光
- 鞆中浦 たひ衣いく夜かさねてしろたへの袖師の浦の月をみるらむ 知来
- 鞆中濱 はる、ゝとこしの長濱北ふきてやつれし袖に波そこえける 宣光
- 鞆中島 いつこそととへはなつかし妹か鳥ひとりやこゝに波まくらせむ 繁樹
- 鞆中夢 はかなしや草の枕の露はかりむすへはむすふふるさとのゆめ 美石
 たよりたになきふる郷とおもひしを夢にはしはしかへりつるかな 浅井廣文
- 鞆中灯 ふるさとの夢のなこりをたつぬれはこゝろとほそるともし火のかけ 顕
- 旅泊 友ふねはありとみなからし人もなみの浮ねをたれとかたらむ 良古
 かたしきの袖のみなどに舟とめて夢もた、よふ梶まくらかな 釋了旺(17ウ)
 ふるさとにこゝろひかれて唐琴の浦のうきねは夢もむすはず 住行
- 旅泊雨 月はや、雲にいり江の泊舟とまもるものは雨となりつ、 繁樹
- 松 引うゑし庭の小まつも年ふりてつゑつくはかり成にけるかな 元明
- 名所松 たれとねて名にはたちけむなつかしき昔をかたれたまくらの松 古道
- 山松 亀山や千世もうこかぬ岩根まついくひなつるかこゝにすこちし 本間養之
- 浦松 人の世もかゝらましかは老の名もしらでとしふるわかのうら松 亮泉
 いにしへの琴のしらへも笛の音も風にのみきくすまの浦まつ 栗田盛英
- 舊都松 千代よはふ聲はむかしにかはらねとさひしくたてりならの山まつ 忠順
- 松風似雨 ふりいてし一村雨のこゝちして軒端におつるみねのまつ風 忠敏
- 薄暮松風 みなと河かはたれときのみつ汐に聲打むせふきしの松かせ 千濤(18オ)
- 松上苔 ときはなる松にかゝれるさかりこけともみとりの色そかはらぬ 恭
- 竹 おこたりのまとの呉竹打なひきはらふもやさし文机のちり 政弘
 まなほにてたけきすかたは敷嶋のやまと心といふへかりけり 正久
- 竹露 呉竹の葉末の露のしたゝりは千代のあまりの雫なるらむ 吉慶

絲瓜 しとけなくなりこそさかれ末つひに世のか、みをもみか、さらめや 音空
 萍 浮草のそことさためすた、よひてなかれわたるも世の中そかし 顯
 鶴 いく千代かかさねきぬらむあしたつの朝日にきえぬ霜の毛衣 亮仁(最後の二画なし)
 名所雀 これやこの老忘れ貝あさるらむたつそむれるる住よしの濱 忠順
 すみの江に千代をならへてたつものは汀のまつと鶴となりけり 正興
 千代経てふおなしよはひの松しまにむれてあそへるたつのゆたけさ 重樹(18ウ)
 鶴立洲 あしたつのおりゐる沖のしらすには浪も千とせのかすによすらむ 武定
 都鳥 天さかるひなにすむ身はみやこ鳥都のことを何ととはまし 惟一
 遠村鶏 朝けふりひとむらみゆる遠かたに聲をもたつる庭つとりかな 篤慶
 鷺 夕しほの引残したる白浪はすさきにたてる鷺の一むら 賢空
 鷺の画に 墨かきの筆にもやかていつはりのある世なりけり鷺の毛衣 音空
 虎 とらへ来て桜のかけにはなちなはあらき心もなこむから、し 忠順
 曉猿叫峽 夜をこめてこゆる山路のかけくらき有明の月にましら啼也 美石
 牛 つくりおきしつみやおほつの車牛か、るおも荷をいかてひくらむ 仁(最後の二画なし) 翁
 雑動物 大路ゆくうしのあゆみのゆたけさをよわたる人の心ともかな 美石
 貝 海人ならぬ世のあて人にひろはれてかひある浦となれもおもはむ 恒雄(19オ)
 なにはかたあまのわらはの打むれてかせもなきさの貝ひろふ也 琴女
 蚯蚓と蛙と ちからなきかへるはつちの中やゆくほねなきものといひなおとしそ 五百杵
 土の中ゆくとはほこれるみ、すをははむなるものをちからなしやは 登波女
 蝸牛 身をいる、ほとたにあればたる事と家をもいてぬ蝸牛かな 常業
 羽田の文庫に千部をさまりたる時書の名をわかちてよめる哥
 古語拾遺 うつりゆく秋をなけきてかへるてのむかしにかへる春やまちけむ 篤議
 葛花 ま賀のひれまかをはらひて真葛原うら吹かへす野への秋かせ 速夫
 萬葉代匠記 斧とりて君しいらすはなら山のしけき木立はたれかわくへき 忠順
 辞の玉緒 ことのはの花のにしきをおりいてむ為にとむすふ露の玉の緒 尋門
 宇津保物語 うつほ木になれてましらのとひくるは妙なることの音にやひかる、 登波女(19ウ)
 落久保物語 こ、ろおくはらそかもとの撫子は露のたもとのひるときもなし 大炊女
 孝經 かそいろのいましたころは此書になとて心をつくさ、りけむ 孝本
 詩 なたしこの花にけちめはみゆれとも唐も大和も種はかはらず 政弘
 硯 す、りの海とはにむかへと藻屑のみかくてかひなきみをいかにせむ 宣光
 筆 さをしかのにこ毛のふての命にもなかきみしかきある世なりけり 公阿
 筆寫人心 もろ人の書なしたる水くきに心のはなの色そ見えける 近藤直愛
 琴 小夜ふけてひとりかきなすつまことはたれまつ風の音にかよふらむ 梅点
 須磨琴 ひとすちの高きしらへにすまの浦のむかしのこともしのはれにけり 恒雄
 三弦 つなきえぬ心のこまそいさむなるみつのをことの音にひかれつ、 忠順
 曉鐘 うらみつるむかしもおなしかねの音を老のねさめのともとこそきけ 美石(20オ)
 碁 うなる子かいしなあそひのあらそひをわらふ翁もうちいとみつ、 忠順
 酒 いなといへとしひるしひさけいなみかねすへなきまてにわれゑひにけり 安全
 灸 さしもくさくゆるけふりのあともなくやかてやまひもきえてゆくらむ 恒雄
 不老不死 たのしきもうきも心にとめぬこそおいす死すのくすりなりけれ 寂湛

茶人のうたこひけるに

このめになることのみこのめ称らしき器このみのねふりさませと 公阿
ある人の浅草海苔をおこせければ

鏡 浅草のあさきめくみとなとかみむ深き海なるのりのたまもの 釋湛猷
天てらす神のさつけしやた鏡ひかりはとはにくもらさりけり 正胤
年ふれとおいせぬものはこゝろにて鏡のかけにおとろかれぬる 遠藤道丸(20ウ)

太刀 うはへのみかさり太刀をははかぬなり大和心をときしものゝふ 公阿
玉 大城あまたてらしゝよりも皇祖の神のさつけし玉そ尊き 古元
明らけき玉のひかりは三代を経てなみたの色にあらはれにけり 恒雄

下和か故事をよみて人のおこせけるかへしに

弓 いかにせむ衣に玉はかけなからみかきもえさるこゝろおそさを 釋寂道
たゝかひのにはのむかしにひきかへて身をやしなふと真弓とる也 正久
目鏡 ぬは玉のよるひるかけてたのむかなうとくなりゆく老の目かゝみ 隆功
箒 あやしくもたへなるわさか心にもおよはぬかすのはかりしられて 正明
灯 まなひえぬ身にはかひなし何事もむかふにくらき窓のともしひ 小塚常平
竹間燈 すむやたれふみよむ聲をとめくれは竹よりおくにみゆる灯 惠直(21オ)
杖 おいの坂こえてこそしれたらちねのいさめし杖のつきぬめくみは 古道
青 枝も葉もおいも若きも皆なからたけはかはらぬみとりなりけり 公阿
黄 むつれきてねふれるてふも葉の花の同じ色なる羽袖也けり (作者名なし)
赤 あかねさす朝日のかけのてりそひて露さへにほふ木々のもみち葉 高柳兼許
白 月しらむ庭の真砂の霜の上にちる色さむき柵のはな 千壽
黒 すゝけたる黒木おはせてしつ男か牛ひきいつるすみ坂の山 (作者名なし)

青黄赤白黒 夕日さす水にみとりの色みえて山吹の瀬にかはつなくなり 長廣
二つ三つ四つ かぜわたる河辺の柳かけくれてこほるゝほたるふたつみつよつ 弘道
従軍行 高紐にかけしかふとの鞆かたにすかる小てふやいもかたましひ 忠敏
いくよわれとけてねぬとは草摺の露になれたる月やしるらむ 英棟(21ウ)

腐儒 よき国のよきはおもはてあしほ山あしかるくにの恋しきやなそ 正胤
隠者 小柴かき奥もあらはに世をいとふ心はかりのへたてなるらむ 恒雄
隠者読書 世の中をそむきし身にもそむかれすふみみてあかすよはのともし火 常業
漁夫 海幸を真柴にかへて朝夕にほそきけふりをたつるあま 正久

浦のあまのつりする糸の一筋に心ほそくも世をわたるかな 田中恒喜

海人 あさ夕に袖をぬらしてくむ汐のからき世わたる浦のあま 釋亮具

舟人 和田のはらはてもなみちに浮ねしてあやうき世をもわたる舟人 釋實道

捨子 ひろひとり人のなさけをまつかけに捨にし親やたちてなくらむ 政弘

美人 小簾こしにをとめの袂にほふ也柳さくらをこきませにして 深見柳女

出浴美人 さらぬたにたくひあらしの山さくらちりも居して雨そゝきけむ 智順(22オ)

遊女 ちきりさへあさ妻舟のかちまくらかはすもあはれ浪のうきねに 宣光

傀儡 こよひまたたれにかみえむあけくれにむかふ鏡のさとのうきみは 美石

源氏物語の巻をわかつてよめる歌の中に

花宴 是やこの繪島のなみにてる月をみるへきつまの扇なりけむ 宣光

葵 ひかれこしことのかやしきかけをのみみたらし河のあしろくるまに 公阿
 蓬生 むすひおくちきりはつひにかれぬともあはれはかけよ蓬生の露 登波女
 薄雲 は、そ葉のちりしあはれをわすれねは秋に心を君はそむらむ 定敬
 野分 曙の霞ににほふ花さくら秋の野分のさわきにぞ見し 公阿
 藤袴 朝日にもえやはとくへき玉さゝの葉わけの露はかけにかくれて 常業
 藤裏葉 なこりなく今はゆるしの色みえて心ときめくやとのふちなみ 恒雄」(22ウ)
 竹川 あふこありてうちとけぬへき契をもかけてそたのむ花の夕はえ 美石
 手習 何事もおもひすてにし手習になほ命毛のつきすもあるかな 恒雄
 夢の浮橋 のとかなる春も夢とそくれにけるにほひし花の名残なきまで 廣冬
 伯夷叔齊 山中になとかはくちしその君の末おこすへきことはおもはで 正胤
 屈原 なへて世の人の心のにこりさけすまぬ中にはすまれさりけり 公阿
 漁父 すまはすめにこらはにこれ河水のなかれての世にまかせたらなむ 音空
 諸葛孔明 かきならすことの心をわきかねていむかふあたもひきそかへせる 於本伎
 文天祥 ひかけみて二とせありし土室のあなたくひなのきみかこ、ろや 繁樹
 釋迦 暁の星にひかりをあらそひてこ、ろの月やてりわたりけむ 英棟
 心 日まはりのくる、日かけにそむかぬそ神の御国のこ、ろなりける 釋道武」(23オ)
 うつりゆく世々のまに、身はなしてこ、ろはかりは赤く染なむ 千濤
 夢 ぬは玉の夢ははかなきものなからうつ、にまさるをりもありけり 正興
 手まらの夢のうちにも世の中のうきをわすれぬわかかな 釋秀定
 忠 ますら雄かとりはく太刀のつかのまも君につかふる道はわすれし 竹生昌信
 述懐 大君のみためならすはいたつらに弓矢なとりそますらをのとも 重鐵
 海ゆかはみつくかはねとなりぬともよるしら浪のかへり見はせし 御楯
 すみにこるこの行末やいかならむ世の中河の水のなかれは 重範
 よしやさはおろかなりとも物部ははちしるまでの心ともかな 忠敏
 あなうたて神の御国にうまれあひて佛たふとふ人そおほかる 忠浄
 とつ国の佛のかとにいりし身もいかてわすれむ日のもとのみち 釋圓潭」(23ウ)
 いたつらに世をはすきしのあらましもたかおこたりに年のへぬらむ 弘道
 何事もみなすきし世のむくいそと身のとかにして人はうらみし 安藤輝女
 いまは世にものおもふこともあらぬ身はた、うみの子のさかえのみこそ 鈴木重野
 老述懐 おいの坂のほりてかへる道しあらはこえゆく年もをしまさらし 糟谷磯丸
 農夫述懐 あら小田をかへす、もおもふかなさてもうき世にあればある世と 神保青定
 春述懐 老ぬれはいと、春こそをしまるれ又みむ花のさためなければ 楠田八重女
 夏述懐 夏のよまた、く水鶏に夢さめてねられぬおいとなりけるかな 通度
 秋述懐 露の身のおきところなくおほゆるやうき世を秋の心なるらむ 信由
 世の中のうきはならひとおもひしをうたてもふくか秋の夕かぜ 釋俊阿
 月前述懐 よの人につ、むおもひのくま、をこたへぬ月にかこつよはかな 鶯山」(24オ)
 燈下述懐 くれまとふ心のやみはか、けてもひかりをくらき夜はのとしひ 常業
 寄川述懐 飛鳥河かはるふちせのあるよこそしつみぬる身の命なりけれ 英棟
 寄夢述懐 ぬるかうちも月と花との膨まくらことなる夢はむすはさりけり 磯丸
 寄笠述懐 いつまでか下にわか名はかくれ笠人のとりきむ世もしらすして 千濤

寄車述懐 うはへのみかさるみあれのすき車ひかれやすきは心なりけり 政弘
 寄舟述懐 た、よへる身をうき舟のかなしきは棹さしよらむとまりたになし 豊村
 醜夷のしは、ゝ来るをうれたみて
 えみしらもみかけかゝふる天つ日のもとの御国にたはわさなせそ 羽田野敬雄
 妙巖寺大法法師と神道葬祭といふことを年ころあらそひわたりつるを安藤長門守殿にうた
 へふみさゝけむとてみたちへまるりけるとき郭公のなきけるをきゝてよめる
 ほとゝきすわかしのひ音を空高くきこえあけむの心しりきや 草鹿砥宣隆
 かくてかしこきみさためありてつひに本意とけければ
 むすほるゝ秋の末野の花すゝきほにあらはれしかひはありけり (作者名なし)
 懐旧 ありし世をしたひ小河のしたはれてたえすそ水の袖になかるゝ 兌健
 佐藤重見か霊祭に春懐旧を
 なき人をこひてなかむる月かけのおほろは春のならひのみかは 繁樹
 夏懐旧 いにしへをしのふ袂にかきくれてなみたも雨とふるさつきかな 美津女
 初秋懐旧 萩の葉の音にも袖はぬれにけりむかしをしのふ秋のはつかぜ 忠順
 秋懐旧 大空の月のかゝみはくもらねと消にし人はかけたにも見ず 石川信尹」(25才)
 袖にのみなみたの露はおきにけりむかしをしのふ秋の夕くれ 釋教存
 石川依平主の霊祭に秋懐旧を
 なき人のかけをさそひてかしかもとりくる月にむかしをそ思ふ 繁樹
 鈴屋翁霊祭に秋懐旧
 つきゝゝにをしへをきくの下葉にもおく露しけき秋のくれかな 重世
 城戸千楯翁七回忌に庭菊を
 秋ことになみたの露のかゝれとて菊さく庭はつくりおきけむ 公阿
 暮秋懐旧 長月の末野のすゝきこの秋もかへらぬ人をなほまねくらむ 正興
 冬懐旧 身にしむもよのつねならすふりし世をしのふ雪けの庭の朝かせ 宣光
 ひかりなく消しむかしの埋火を思ひおこしてしのふけふかな 正興」(25ウ)
 鈴木真重か廿三年の霊祭に冬懐旧を
 友千とりなくねもいとゝそのかみにたちこそかへれ袖のしら波 美石
 糟谷重三か身まかりたるに寄雪懐旧
 いにしへはともにまなひの窓の雪きゆるをきえぬ身に忍ふかな 公阿
 妻のみまかりける又のとしの秋月をみて
 月々にもかくるならひの世のさかをわか身ひとつとなけく秋かな 宣光
 今はのときに
 八十あまり月よ花よとなかめ来て此世の外のおもひてもなし 渡辺富秋
 先祖の墓に松をうゝとて
 萬代もしけりにしけれ末とほくするしにうゝゝこれのわか松 村上義忠」(26才)
 遠祖助兼君の像に
 岩手山雪ふりしきて薄かねの鎧の袖はいかにさえけむ 道武
 無常 なき人のけふりを雲となかむれは身をしる雨そ袖にしくるゝ 常業
 なき人のゆくへむなしき夕けふりなかむるわれもおもひきえつゝ 英棟
 冬無常 世の中はかれ野の霜の翁草のこるといふもあはれいつまで 音空

寄花無常 はかなさはおなしたくひを咲てちる花のうへのみ人のいふらむ 登波女
 哀傷 うつ、ともみしはきのふの夢なれやわかれそけふのうつ、なりける 長尾興達
 あたし野の露ときえにし人の世をきけはよそにもぬる、袖かな 井上由加女
 豊村か身まかりし時桃花のさかりなるをみて
 三千とせになるてふ桃の花みてもはかなくかれし梢をそ思ふ 美石」(26ウ)
 やよひのはしめ獨子うしなひける親のもとにつかはしける
 あたし野のけふりの末にたつひはりち、となくねも身にやしむらむ 宣光
 去年の冬父の身まかり給ひしおもひにこもりゐける頃庭のさくらのちるをみて
 しら雪ときえしもきえぬおもかけにちる花みてもぬる、袖かな 正久
 謙誉法師葉月十五日みまかりければ
 すみわたるこよひの月に先たちてねかひし西に君はゆくらむ 正興
 九月三日柳園翁没りぬとき、て
 おひしかむ道のくまわもおもほえすとほつあふみの遠きわかれは 忠順
 人の身まかりけるとき菊の花をたむくとて 』(27オ)
 菊のはないさたむけむととる袖になみたの露のかゝる秋かな 篤慶
 弟御楯身まかりしとき紅葉をみて
 その色に袖もしくれてかむな月もみちみるにもちる涙かな 重鐵
 子をうしなひけるときよめる
 髪なて、千代の小まつとおもひしはなみたの種のおひしなりけり 大成
 いまはのきはに朝かほの花をみて
 朝顔の花におきるそれよりも露のこの身そはかなかりける 圓壽
 浪華にて友の身まかりけるよしき、て
 津の国のこや夢ならむきのふまでみつとは人のいひけるものを 古道
 日ころむつましうあひかたらひける友のしはし音つれさりければいかに 』(27ウ)
 もやとおほつかなう思ひぬるほとに其うからの人より俄の病
 にてうせぬるよしいひおこせけるにおとろきて
 あるときはありのすさひのおこたりをおもふも今はくい八千度 宣光
 釋教 三千とせのむかしの春をしへのとてとくや御法の花の下ひも 報阿
 聲聞 おとろかすわしのみ山の松かせになかきねふりの夢そさめゆく 守景
 法華經譬喩品の意を
 あつき国す、しき里とすまへるは同しおもひにもゆるなりけり 音空
 觀經化前の序の意を
 わしの山麻のそのふのをり、ゝもこの御法のみ思ひかけ、む (作者名なし)
 同傾浄録の意を 』(28オ)
 ひとり世にすくてみゆるまき柱たてし誓やたくみなるらむ 公阿
 同者闇會の意を
 九重にしひて啼しほと、きすきかむと思ふ人にかたらむ (作者名なし)
 学の友につかはしける
 たつねいる法の林のいやたかき花のにほひや袖にみつらむ 釋卍秀
 神祇 宮はしらしつつ岩ねにたてしより神もうこかぬ世を守るらむ 英棟

四方八方のえみしの国も日のもとの神の恵にもる、やはある 恒雄
 いす、河清きなかれにすむ月や神代のま、のひかりなるらむ 鈴木嘉保
 寄花神祇 桜さく春の野の色もちいつしきねか心やのとけかるらむ 鈴木重秀
 社頭松 玉かきにとしへてたてる松なれば風の音さへ神さひにけり 菅守」(28ウ)
 君が代もか、れと神のこ、ろもてひと夜に千代の松はうゑけむ 顯
 社頭鳥 岩屋門のむかしおほえて鳴鳥の聲よりしらむ杜のあけほの 常業
 意富加牟豆美命に父のよはひを祈るとき
 三千とせはおよはすともち、のみの父にはゆつれも、のよはひを 三宅國克
 おのか大神の拜殿を新しく仕へ奉れる時よめる七十になりければ
 なからへしそのかひありて宮柱ふとしくたてるけふにあひけり 草鹿砥宣紀
 祝 大君のめくみの露しふかければたみの草葉もおひ茂るらむ 報阿
 寄神祝 千五百秋みつほの国をしらせとて神のよさせる御代はうこかし 公阿
 寄月祝 久かたの月のひかりもます鏡くらぬ君か御代をうつして 釋禪超
 春祝 とことはにさかゆく君か御代なれば空ものとかに春かせそふく 年之女」(29オ)
 秋祝 山のおく磯の洲先もとみ草の花さきみのる御代そゆたけき 千濤
 寄書祝 いにしへのふみみてこそはことたまのさちはふ国のほともしらるれ 従繩
 寄国祝 安国とつたへき、つ、うらやまむ神てふ名たにしらぬえみしも 美石
 寄民祝 小山田をかへすしつのをしきまきの名をたにしらぬ君か御代かな 繁樹
 寄松祝 千とせふる松もはしめてかくはかり枝をならさぬ世にはあふらむ 英棟
 寄花祝 うれしくもすめら御国に生れ出てゆたかなる世の花をみるかな 正寛
 寄海祝 貢物はこふ千舟も百ふねもやすくゆきかふなみのうへかな 豊村
 人の賀に 世のたから数ある中にえかたきは君かたもてるよはひなりけり 高井親恒
 ある人の双児まうけたる祝に
 生そめしならひの岡の姫小まつ千代こそみゆれ一木々に 鳩臺」(29ウ)
 出雲尊孫宿祢の六十賀に
 をちこちのふる河きしわかくるすいやわかえませよろつ代までに 繁樹
 平田鏡胤主の六十賀に
 もろともに千代へて後のかくり世もうつし世のことむつひまつらむ 敬雄
 六十一賀 あれいてしそのかみ山のあふひ草もとの二葉にかへる年かな 音空
 羽田野敬雄が六十一の賀に
 過來にし六十はおきて一とせのあまりを千世のはつ春にせよ 忠順
 七十賀 稀なりといはふよはひや三千とせのも、よろこひのはしめなるらむ 信由
 鈴木光重の父七十七歳の七月七日に菘の字を書いて
 うたこひけるに 』(30オ)
 天の河あらむかきりはなからへて猶よろこひの数をかさねよ 充芳
 青山青翁か八十賀にやそちの賀といふことを折句にして
 やしはなのその中は子のち、となるのちまで君はか、れとそ思ふ 公阿
 尾張国有松の里竹田某か八十賀に
 ところえて此有松に来つ、なくつるこそ君か千代はしるらめ 光重
 萬民祝 あし原やたみの草葉もおしなへて露みたれなき君か御代かな 壽仙

幸遇太平代 もしほ草机の島にかきつめて御代のさちうるみやひをのとも 宣光

物名

かにはさくら この花にたか袖ふれし春よりかかくなつかしきかにはさくらむ 英棟
はなもみち うきことはなくて此世をうらやすくくらすも道のあれはなりけり 厚給」(30ウ)

つるかめ 咲いつる花のよはひも長月にいろかめてたくにほふきくかな 英棟

一富士二鷹三茄子 ひとふしのうきたにしらしたかむらにすみなす人の千世のやとりは 宣光

木火土金水 世の中をあきはてぬれはひつちほのみになりかねしみつからそうき 忠順

躰名十 けふもまたかた野のはらに風こえてちりはてぬめり秋はきの花 廣冬

木名十 とくこむとちきりし人もみえぬまにむなしくふくる待宵の月 五百杵

鳥名十 なみたかきかもの河きしかけうつる月のけしきもすゝしかりけり 英棟

杉の金戸をことほきてよめる

回文調 むへもよきかなとゝいはへたゝへいへたゝへはいとゝななき世もへむ 全

」(31オ)

白紙」(31ウ)